

『水滸伝』中の美人描写

Exploring the Descriptions of Beautiful Women in “ShuiHuZhuan”

曹 述 燮

JO Sulseob

Abstract

This paper explores descriptions of beautiful women and divides them into groups based on the common points of their character in “ShuiHuZhuan” which is a famous Chinese classic novel that tells a story describing the society of the BeiSong Dynasty through mainly focusing on their lives as Chinese “good fellas”. In the stories around 70 women appear, and among them are what is deemed “beautiful women” who show up with descriptions of under what kind of situation and in what way they appear. From analyzing this, we can confirm the following:

1. Beautiful women must first possess good outward appearance, and rarely the next considerations are the beauty of their psychological depiction in areas such as their character, nature, intention, or their talents and dress required for performing their work.
2. In the women who possess good looking appearance, the most important part of the image that makes a woman look like a woman is to be thin and have a soft shaped waist like a willow waving in the wind in the spring season.
3. A woman naturally gains the attention of men by only being beautiful, and women with great beauty have the value of property to others though predominantly to males only as sex objects.

はじめに

美 beauty とは、姿・形・色彩などの美しいことを意味するもので、哲学的には、調和・統一のある対象に対して、利害や関心を離れて純粋に感動するときを感じられる快。また、その快を引き起こす対象の持つ性格を意味するもの。百科事典においては、「感覚、特に視聴を媒介として得られる喜び、快楽の根源的体験の一つ。対象に見られる均衡、充実、輝きによって惹起されるが、直接感覚を通さない、いわゆる精神美も考えられ、超越美と呼ばれる。現象形態からみると自然美、芸術美に大別され、20Cには機械美が加えられた。……」¹⁾と定義される。このような「美」の観点が、人類の半ばを占める女性を対象に適用されたものが、いわゆる世で称賛される美人というものなのであろう。

歴代の中国社会においては、四大美人に数えられる西施、貂蟬、王昭君、楊貴妃を含め、名

の知れた美人が数多い。ところで、彼女らが美人と呼ばれる所以は何にあるのか。中国で美人と呼ばれる女性は、一般的に、柳叶眉（細長い眉）、杏核儿眼（アンズの種に似た大きくて丸い目）、鵝蛋脸（卵形の顔）、櫻桃小口（唇が赤く小さい口）などといわれる²⁾形容句のごとく、容姿において形式化した外見美をそなえていた。そして、体つきはだいたいほっそりしていることが好まれたが、これとは対照的に、楊貴妃は豊満な肉つきの女性であったことで知られており、だれの何をもって美人と感じるかについては社会文化的に同じ背景をもつものにして時代と地域による差、そして個人による差が生じえる。

この論文においては、主に男性の好漢たちの生きざまを中心に据え、北宋社会を活写しているストーリー『水滸伝』において、大小のキャラクターをそなえて登場する約 70 名の女性中、美人はどのような場面に登場、いかに描写されているかをたどる。これにより、『水滸伝』で描写される美人のイメージは如何なるものかの実際を確認してみることにする。

1. 豪傑タイプの美人

才知、武勇に並はずれてすぐれていて、度胸のある人物。些細なことにこだわらない豪放な人物。時には一風変わった人物を指す豪傑。宋代の徽宗の時代、宋江ら 108 人の豪傑が梁山泊へ集結、その後の悲壮な運命を描く『水滸伝』のストーリーの 108 人を数える豪傑中の 3 名は、孫二娘、顧大嫂、扈三娘の女性で占められている。

まずは孫二娘。地壮星。あだ名が母夜叉（女の夜叉）。梁山泊第百三位の女頭領。伴侶張青といっしょに孟州十字坡において、金を持っていそうな客をしびれ薬で殺して金をうばい、その肉は肉饅頭などにしてかせぐという商売の人肉酒屋をしている女性。大の男二人で担ぐどころか引きずることさえできないものを軽々とつりあげることができる力持ちで、オイハギ稼業で世をわたってきた腕の立つ父親から武芸をとつくりしこまれているもの。兄の武大を殺害した兄嫁潘金蓮や事件の関係者を自ら処断したことで孟州への流刑の判決をくだされた武松が、ながされる途中、孫二娘が営む人肉酒屋にたちよるところに登場している彼女の様子は、

看看抹過大樹邊，早望見一個酒店，門前窗檻邊坐著一個婦人，露出綠紗衫兒來，頭上黃烘烘的插著一頭釵環，鬢邊插著些野花。見武松同兩個公人來到門前，那婦人便走起身來迎接。下面繫一條鮮紅生絹裙，搽一臉胭脂鉛粉。敞開胸脯露出桃紅紗主腰，上面一色金鈕。見那婦人如何：眉橫殺氣，眼露凶光。轆軸般蠶空腰肢，棒槌似桑皮手腳。厚鋪著一層膩粉，遮掩頭皮，濃抹就兩暈胭脂，直侵亂髮。紅裙內斑斕裏肚，黃髮邊皎潔金釵。釧鐃牢籠魔女臂，紅衫照映夜叉精。

當時那婦人倚門迎接說道：「客官，歇腳了去。本家有好酒好肉，要點心時，好大饅頭。」兩個公人和武松入來，那婦人慌忙便道萬福。……（第二十七回 母夜叉孟州道賣人肉 武都頭十字坡遇張青 P390³⁾）

どんどんその大木のそばをすりぬけると、早くも目に入る一軒の居酒屋。門前の窓枠のどこ

ろに、緑紗の上衣をむき出しにして、一人の女が坐っております。頭には金ぴかに一面の髪飾り、鬢の辺に挿すは何本かの野の花。武松と二人の警吏が門前にやって来たのを見て、その女は立ち上がって出迎えます。下には真赤な生絹の裳を着け、顔じゅうに紅おしろい、はだけた胸からのぞくは桃色の紗の腹巻き、その上には一つらなりの金ぼたん、その女のさまいかにと
いえば、

眉には殺気をみなぎらし、眼には凶光をあらわす。轆ろの軸のごとくにぶざまなる腰肢、棒と槌にも似たる桑皮の手脚。厚く一層のおしろいをぬりて、がさつなる皮を遮り掩い、濃く両ほおの胭脂をぬりなして、直ちに乱れたる髪を侵す。赤きもすその内なるはあざやかな腹巻、黄なる髪には皎潔なる金のかんざし。うでわは魔女のうでをとりかこみ、紅のうわぎは夜叉の精に照り映ゆ。

そのとき女、門を背にして出迎えつつ、

「旦那、休んでいらっしやい。うちの店にはいい酒といい肉がございます。間のものには、大きな饅頭。」

警吏二人と武松、中へはいれば、女いそいそと、「いらっしやいまし。」・・・(岩波文庫巻3 P191)

とある。凶悪な目つき、どっしりした腰、太くてごつごつとした手足。髪には金ぴかの髪飾り、鬢のあたりには野の花も挿しており、顔には白粉や胭脂などのお化粧をして、色鮮やかな服を着ているが、どっちをみても美人というにはほど遠く、醜いこと魔女や夜叉にまがうばかりのものであるとする。次は、顧大嫂。地陰星。あだ名は母大虫（メス虎）。梁山泊第一百位の女頭領。登州東門外十里牌で居酒屋をしており、牛を殺すことや賭場を開くことなどを行っている。二本の刀をつかう。二三十人がたばになってもかなわないばか力の持ち主で、夫の孫新でも歯がたたないほど。登州の牢城の牢番をしている樂和から父方のいところである解珍、解宝が無実の罪で投獄されたと知らされると、夫の孫新と相談して人を集めて救い出し、一行で梁山泊に仲間入りにいく女性。彼女の様子は、

樂和見酒店裏一個婦人坐在櫃上。用眼看時，生的如何，但見：

眉粗眼大，胖面肥腰，插一頭異樣釵環，露兩臂時興釧鐲。紅裙六幅，渾如五月榴花，翠嶺數層，染就三春楊柳。有時怒起，提井欄便打老公頭，忽地心焦，拿石確敲翻莊客腿。生來不會拈針線，正是山中母大蟲。

樂和如進店內，看這顧大嫂，唱個啞道：「此間孫新嗎？」顧大嫂慌忙答道：「便是。足下卻要沽酒，卻要買肉？如要賭錢，後面請坐。」樂和道：「小人便是孫提轄妻弟樂和的便是。」顧大嫂笑道：「原來卻是樂和舅，數年不會拜會。尊顏和姆姆一般模樣。舅舅且請裏面拜茶。」・・・（第四十九回 解珍解寶雙越獄 孫力孫新大劫牢 P728）

樂和、居酒屋の中を見ますと、ひとりの婦人が、勘定場にすわっています。じっと見定めれば、その生まれつきいかに、げにげに、

眉はふとく眼は大きく、こえたる面にあぶらぎったる腰。頭じゅうに挿すは異様なるかんざしと環、両うでにあらわすははやりのうでわ。紅き^も裙の六幅は、あたかも五月のつつじの如く、翠のえりの数層は、三つきの春の楊柳を染めなす。時有りて怒り起れば、井げたを提げてすなわちおっとの頭を打ち、たちまちに心いらだてば、石うすをもちてさくおとこのあしを敲きたおす。生まれてより針と糸をとるを知らず。正にこれ山の中のめんどらなり。

楽和、店のなかへ入り、顧大嫂を見ながら、敬礼し、

「こちらは孫さんかね。」

顧大嫂、いそいで返事をします。

「そうだよ。あなたは、酒かね。それとも肉かね。もしばくちを打つのなら、うらの方のお席で。」

楽和、「わたくしは孫隊長の妻の弟、楽和です。」

顧大嫂、笑って、「おやまあ、楽和さんでしたか。何年か、お目にかかりませんが、お顔はおねえさんそっくり。にいさん、まあ、奥でお茶を。」・・・(岩波文庫巻5 P248)

とあり、ふとい眉に大きな目、肉づきがよい顔、肥えた腰。変わったかんざしを挿し、また流行の腕輪をしており、綺麗な染め上がりの紅いスカートに緑の上着を着ている女性。ところで、二三十人がたばになってもかなわないばかりの持ち主で、怒った時やイライラしている時には、手当り次代身の回りのものをひっさげて、夫の頭だって作男の脚だって構わずぶちのめし敲きたおしてしまう女性。このような顧大嫂を魅力的だと感じるか、あるいは美人だと考えるかは、書かれている描写だけでは判断しがたい。ただ、高島俊男氏によれば、

「顧大嫂はハキハキして、そそっかしいおばちゃんだ。孫新との夫婦仲もあかるくてよさそうな気がする。」⁴⁾

というコメントがついているところからしても、描写から受ける感じや下す判断にはまた個人差が大きくあらわれそうなところである。ところで、もう一人の豪傑タイプの女性、扈三娘。彼女は、海棠の花と称されるほどの美人。地慧星。あだ名は一丈青。梁山泊第五十九位の女頭領。鄆州独龍岡の扈家荘の人。宋江が鄆州独龍岡の隣村祝家荘をせめた際、祝家荘の村おさの三男といいなづけであることが所以で援軍として登場する場面を見れば以下の通り。

山坡下來軍約有二三十騎馬軍，當中簇擁著一員女將。怎生結束，但見：

霧鬢雲鬟嬌女將，鳳頭鞋寶蹬斜踏。黃金堅甲襯紅紗，獅蠻帶柳腰端跨。霜刀把雄兵亂砍，玉手將猛將生拿。天然美貌海棠花，一丈青當先出馬。

那來軍正是扈家莊女將一丈青扈三娘。一騎青驄馬上，輪兩口日月雙刀，引著三五百莊客，前來祝家莊策應。宋江道：「剛說扈家莊有這個女將好生了得，想來正是此人。誰敢與他迎敵？」說由未了，只見這王矮虎是個好色之徒，聽得說是個女將，指望一合便捉得過來。當時喊了一聲，驟馬向前，挺手中鎗，便出迎敵一丈青。・・・(第四十八回 一丈青單捉王矮虎 宋公明兩打祝家莊

P715)

坂の下からの寄せ手は、二、三十騎ばかりの騎兵、中におし立てるは女武者ひとり。その装束いかにといえば、げにげに、

霧なす鬢と雲なす環にあでやかなる女武者はあでやかなり。鳳の頭のくつはめでたき鎧を斜めに踏みたり。黄金の堅きよろいに赤き紗をしたぎにし、獅しと蛮じんの帯は柳のごとき腰にただしくしめられたり。おおいなる斧はたけき兵を乱れきり、玉のごときほそき手は猛き将を生きながらとらう。天然の美貌は海棠の花、一丈青はまっ先に馬を出だしたり。

この寄せ手こそは、扈家荘の女武者、一丈青の扈三娘。一頭の黒馬の上で、ふた振りの日月の双刀をふりまわし、三、四百人の作男をひきつれて、祝家荘へと応援にきたのであります。宋江、

「扈家荘にありと知られた、女武者ひとり、とても腕利きだと、さきほど聞いたが、それこそこれにちがいない。だれかあれとわたりあうものはないか。」

といいもおわらぬうちに、かの王矮虎は、色好みのおとこ。女武者だと聞き、ひともみしてつかまえてやろうと、さっそくときの声をあげ、馬をはせてすすみ出ました。手に持った槍をかまえるや、一丈青に立ち向かいます。(岩波文庫巻5 P218)

スケベ根性をおこしていどんできた王英を、いとも簡単に生け捕りにする。武芸の腕前がすばらしく、ふた振りの日月の刀をつかう。しかし、宋江をみつめて深追いしたところ、林沖に生けどられ、梁山泊に護送されてしまう。後、扈家荘は、乱暴者の李逵によってみな殺しのうき目にあい、やきはらわれてしまい、孤立無援となった扈三娘は、宋江の父を義父としてあおぐ。祝家荘攻略の戦勝いわいの席上、宋江よりいきなり持ち出された王英との縁談に対し、辞退もしかね、その場で礼をのべて縁談をうけいれる。結婚後、夫とともに梁山泊の山寨の裏手に寨をもうけ、馬匹を監督することとなる女性。高島俊男氏が、

「日月両刀をつかう武芸の達人、しかもとびきりの美人という設定だが、この扈三娘、物語のなかで案外生動していない。さっそうと登場して梁山泊の数将をけちらしたところまではよかったが、とらえられた後は精彩がなくなる。スケベでチンチクリン、しかも自分よりもはるかによわい王英と結婚させられる段になっても、唯々諾々としたがう。かずかずの戦闘にさいしても黙々と任務をこなし、おしまいには夫のアダをうとうと敵将をおったあげく、あえなくうち殺されてしまう。最後まで礼教の倫理のワクでしか生きえなかったかの女の姿こそ、水滸伝成立当時の時代の一面を反映しているといえよう。」⁵⁾

とコメントしているように、人物の全体的生動さには精彩を欠いている印象がいなめない。ところが、彼女の容姿に対する描写を見れば、1) 霧なす鬢と雲なす環（ふさふさとした美しいびん髪やまげ）、2) 柳のごとき腰（ほっそりした腰つき）、3) 玉のごときほそき手（玉のように白くて細い手）とあり、海棠の花のように美しい天然の美貌に加え、「鳳の頭のくつはめでたき鎧を斜めに踏みたり。黄金の堅きよろいに赤き紗をしたぎにし、獅しと蛮じんの帯は柳

のごとき腰にただしくしめられたり。おおいなる斧はたけき兵を乱れきり、玉のごときほそき手は猛き将を生きながらとらう。」と、服装や身だしなみもまた天然の美しさを際立たせる装置であるというセンスをきかせた形で描写されている。つまり、男に勝るとも劣らない武芸を身につけている彼女だが、男性とは異なる女性としての魅力にあふれる質をそなえているとするのである。

以上、豪傑タイプの女性3名、孫二娘、顧大嫂、扈三娘の登場に際する容姿に関する描写を取りあげてきたが、これらから総合していえることは、1) 美醜を問わず、女性の登場においては容姿について語られるとともに、みだれ髪に、目つきがきつく、ずん胴腰で、分厚くごつごつした手足を醜とし、魔女や夜叉に譬えて語られ、ふさふさとした美しいびん髪やまげに、ほっそりした腰つき、そして白くて細い手を美とし、花や玉に譬えて語られるということ、2) 豪傑タイプの女性と美とはかならずや結びつくものではないということである。

2. 浮気性タイプの美人

浮気。異性に心が引かれやすいさま。情が深く、感じやすく、繊細で、優美にも通じそうな多情。ところが、これが配偶者や婚約者がいながら、他の異性に気が引かれ、関係を持つようになる、個人の性格や習癖の側面を超え、社会的に人間関係を規定する範囲、原理の確立と関連するモラルとして扱われるようになり、社会や時代による多少の差はあるにせよ、指弾の対象になりがちである。『水滸伝』においては、浮気性タイプの代表として取りあげられるのが、潘金蓮と潘巧雲。二人のキャラクターの概略は以下のとおり。

まず、潘金蓮。年は二十二。清河県の物持ちの小間使だったが、なかなかの美人だったので、物持ちが手をだそうとした。それをはねつけて女主人にいつけたため、物持ちにさかうらみされ、清河県一のブ男武大に嫁入り道具つきのタダで嫁入りさせられる。このためまちの連中にさんざんからかわれ、清河県にいたたまれなくなった夫武大と一緒に陽谷県紫石街に引っ越してきて居をかまえ、武大のいつもの炊餅の振り売りで生活しているうち、故あってよそに逃げていたが、帰り道に通りがかった陽谷県の景陽岡で人食い虎をなぐり殺し、同県の都頭（守備隊の隊長）にとりたてられた武大の弟武松と対面。

武大説道：「大嫂，原來景陽崗上打死大蟲新充做都頭的，正是我這兄弟。」那婦人叉手向前道：「叔叔萬福。」武松道：「嫂嫂請坐。」武松當下推金山、倒玉柱，納頭便拜。那婦人向前扶助武松，道：「叔叔，折殺奴家。」武松道：「嫂嫂受禮。」那婦人道：「奴家也聽得說道，有個打虎的好漢迎到縣前，奴家也正待要去看一看，不想去得太遲了，趕不上，不曾看見。原來卻是叔叔。且請叔叔到樓上去坐。」武松看那婦人時，但見：

眉似初春柳葉，常含著雨恨雲愁；臉如三月桃花，暗藏著風情月意。纖腰裊娜，拘束的燕懶鶯慵；檀口輕盈，勾引得蜂狂蝶亂。玉貌妖嬈花解語，芳容窈窕玉生香。

當下那婦人叫武大請武松上樓，主客席裏坐地。・・・(第二十四回 王婆貪賄說風情 鄆哥不忿鬧茶肆 P330)

武大、「おまえ、景陽岡の峠で虎を打ち殺し、組頭に新任されたというのは、それこのおれの弟だったよ。」

女、手をくみあわせて進み出ると、「はじめまして。」

武松、「ねえさん、どうかそこへお座りください。」

武松、さっそく金山玉柱をおし倒したように、はたと平伏すれば、女、すすみ出て武松を助けおこし、「二郎さん、それでは、わたくし罰が当たります。」

武松、「あいさつは受けてください。」

女、「虎退治の豪傑を、県庁前で歓迎するといううわさは、わたしも聞きました。わたくしも見物に行くつもりを、あいにく行くのが遅れて間に合わず、お目にかかれませんでした。まあ、それが二郎さんだったのね。さあどうか二階へ通ってゆっくりして下さい。」

武松、女をみれば、げにも、

眉は初春の柳の葉に似て、常に雨の恨みと雲の愁いを含みつつ、おもては三月の桃の花の如くにして、ひそかに風情月意をひそめたり。ほそき腰のしなやかなるに、ひきつけられて燕のまよい鶯のものうく、あかき口の軽やかなるに、かどわかされて蜂は狂い蝶は乱る。玉貌は妖嬈として花にして語を解し、芳容は窈窕として玉にして香を生ず。

そのとき、女、武松を二階に通すよう武大にいいつけ、主客の席につかせます。・・・(岩波文庫巻3 P47)

と、1) 初春の柳の葉に似ている細い眉、2) 三月の桃の花のようにあでやかな潤いを含んだ顔、3) 細くてしなやかな腰、4) 軽やかに小さく赤い口、それが全体的には、「玉のように美しい容姿は妖艶で声を発する花のようであり、立派な容貌はしとやかで奥ゆかしく、香りを漂わせる玉のようである。」とする。そして、彼女は武松の男っぷりのよさを見て同居させ、冬のある日、武大の留守をよいことに、5) やわらかな胸をはだけ、6) ゆたかなまげをかたむけた格好で、顔には笑みをたたえつつ武松にさそいをかける。しかし、はねつけられる。この一件をきっかけに、武松はもとどおり役所に住むようになり、しばらくした後は知県の命で東京へ出張。

ある日、潘金蓮はいつものようにすだれをかたづけようとし、手元をくるわしてとおりがかりの男西門慶にあててしまう。その西門慶は、潘金蓮を一目見るなりほれこみ、武大家のとなりに住む王婆さんに相談を持ちかけることで、二人は毎日王婆の茶屋で引き合う関係になる。それが武大に知られ、まずく考えた三人。武大を毒殺。これらの経緯は、やがて出張から戻ってきた武松につきとめられ、潘金蓮は五臓六腑がつかみ出されて武大の霊前にそなえられた後、

首が斬りおとされてしまう。

二人目は潘巧雲。薊州の人。むかし肉屋をしていた潘老人の娘。一度薊州の人、王押司（係り長）にとついだが、二年前に亡くなる。今度は役所のつとめで月に二十日以上も牢にとどまる楊雄がむこいりし、まだ一年もたっていないことでいつもさびしくしている女性。ある日、伴侶の楊雄が、義兄弟の縁を結んで家につれかえてきた義弟石秀と対面。

楊雄入得門、便叫：「大嫂、快來與這叔叔相見。」只見布簾裏面應道：「大哥、你有甚叔叔？」楊雄道：「你且休問，先出來相見。」布簾起處，搖搖擺擺走出那個婦人來。生得如何，石秀看時，但見：

黑鬢鬢兒，細彎彎眉兒，光溜溜眼兒，香噴噴口兒，直隆隆鼻兒，紅乳乳腮兒，粉瑩瑩臉兒，輕嫵嫵身兒，玉纖纖手兒，一捻捻腰兒，軟膿膿肚兒，竅尖尖腳兒，花簇簇鞋兒，肉奶奶胸兒，白生生腿兒。更有一件窄湫湫、緊擱擱、紅鮮鮮、黑稠稠，正不知是什麼東西。

有詩爲證：

二八佳人體似酥，腰間仗劍斬愚夫。雖然不見人頭落，暗裏教君骨髓枯。

原來那婦人是七月七日生成的，因此小字喚做巧雲。……(第四十四回 錦豹子小徑逢戴宗 病貫索長街遇石秀 P654)

楊雄、門をはいりますと、「女房、早くおいで。この弟にあいさつするのだ。」

と呼べば、のれんの中から返事あって、「にいさん、あんたに弟があつたの。」

楊雄、「わけは聞かずに、ともかくあいさつに出て来い。」

のれんのかきあげられたところより、しゃなりしゃなりと歩み出たかの女、ようすはいかにと、石秀見れば、げにげに、

黒くくろぐろしたる鬢、細くまがりひかれたる眉、光りてきらきらしたる眼、香りぷんぷんたる口、とおりてたかまりたる鼻、紅くすべすべしたるおとがい、しろくつやつやしたるかお、軽くたおやかなるからだ、玉のごとしなやかなる手、一えにあだめく腰、軟らかくふわふわしたるはら、せまく尖がりたる脚さき、もようはなばなしきくつ、肉もりもりしたる胸、白くういういしきあし、更に一ところのせまくして湫湫、しまりて擱擱、紅くして鮮鮮、黒くして稠稠なる有り、はて是れなにもなるか知らず。

その証拠には次ぎの詩、

二八の佳人体は酥に似たり

腰間に劍をよこたえ愚夫を斬る

然く人頭の落つるを見ずと雖も

ひそかに君の骨髓をして枯れしむ

さても、このおんな、七月七日の生まれ、それで幼な名は巧雲、……(岩波文庫巻5 P82)

と、1) 黒くくろぐろしたる鬢、2) 細くまがりひかれたる眉、3) 光りてきらきらしたる眼、4) 香りふんぷんたる口、5) とおりてたかまりたる鼻、6) 紅くすべすべしたるおとがい、7) しろくつやつやしたるかお、8) 軽くたおやかなるからだ、9) 玉のごとしなやかなる手、10) 一えにあだめく腰、11) 軟らかくふわふわしたるはら、12) せまく尖がりたる脚さきに、もようはなばなしきくつ、13) 肉もりもりしたる胸、14) 白くういういしきあし、とある外見美に加え、更に一つ、「一ところのせまくして湫湫、しまりて擲擲、紅くして鮮鮮、黒くして稠稠なる有り、はて是れなにもなるかを知らず。」と描かれる、魅惑極まらない女性。

そのような彼女が、亡くなりし前夫王押司の二周忌が近づき、その追善供養は家でおこなうことにし、前から師兄と呼びながら親しくしていた報恩寺の僧海闍黎も導師の一人としてやってきた。もともと潘巧雲に気がある僧海闍黎。潘巧雲のほうも自分に気がないわけではないようなのをみた海闍黎は、供養ののち、彼女を報恩寺にさそい、さらには言葉巧みに自室へさそって口説く。すると、潘巧雲がまんざらでもなく身をゆるしてくれるのみでなく、楊雄が留守のときをねらって、家にむかえいれてくれるようになり、ひと月あまり不義をかさねてきている。ところが、それを楊雄の義弟石秀に嗅ぎつけられ、楊雄にも知られるようになった。結局、潘巧雲は古い墓がある翠屏山につれていかれ、舌をえぐりだされ、ひととおりののしられた後、腹を裂かれて最後をむかえる。えぐりだされたはらわたは松の木にひっかけられている。

以上、浮気性タイプの美人の代表格として数えることができる人物潘金蓮、潘巧雲の登場場面を取りあげてきた。これらのストーリーや描写において共通するところ、それは、1) 彼女らはいずれも配偶者がいながら配偶者以外の男性に興味を持ったり、あるいは配偶者以外の男性と色情の関係を持ったりしていること、2) 彼女らはいずれも世間の人々、特に男子の目を引くほどの結構な美をそなえており、このような女性美の究極は男性を性的関係へといざなう誘引剤とみなされていること、3) 彼女らが持つ美の様子が配偶者の親類関係にある男子の目線で認知されるとともに、彼女らのもつ色沙汰の破綻もまたその男性らによってひきおこされていること、4) 色沙汰の結末は、横死であるのみならず、内臓がさらけ出されるような悲惨さをとまなうもので、指弾されるにたるといふ認識を含んでいること、などが取り上げられる。

3. “行院” 籍の美人

色や芸を売って生業とする妓優が起居する行院。「妓」は、「唱妓」とも呼ばれ、後世もつばら肉体を売る女性を指すようになるものだが、もとは歌舞などの技芸を専門に学ぶ女芸人を指した「伎（技）」の意味からきたもの。そして、「優」はもちろん芸人を指す「女優」とか「女伶」などに類することばであるが、事実、芸人は常に売笑を兼ね、唱妓もまた芸を提供しなければならずということにより、社会における身分・地位・生活のなどが非常に近かったので、

両者には時として明確な区別がなく、合わせて「妓優」とか「唱優」とかでよばれていた存在^④。『水滸伝』において、彼女らを代表格として取り上げられるのは、李師師と白秀英。

まず、李師師。東京きっての妓女。天子のお気に入り、内裏から彼女のところまでは地下道がつけてあり、二・三日とまっていけることもあるとする。天子に梁山泊の内情をつたえ、招安してもらおうと、燕青が彼女に会いに行ったときの場面。

李師師在窗子後聽了多時，轉將出來。燕青看時，別是一般風韻。但見容貌是海棠滋曉露，腰肢如楊柳裊東風。渾如閨苑瓊姬，絕勝桂宮仙姊。有詩爲證：

芳容麗質更妖嬈，秋水精神瑞雪標。鳳眼半彎藏琥珀，朱唇一點點櫻桃。露來玉指纖纖軟，行處金蓮步步嬌。白玉生香花解語，千金良夜實難消。

當下李師師輕移蓮步，疑蹙湘裙，走到客位裏面。……(第八十一回 燕青月夜遇道君 戴宗定計賺蕭讓 P1181)

李師師、窓のうしろでややしばらく聞いていましたが、めぐり出て来ました。燕青、見れば、まことに一味ちがった風格、げにげに、容貌は海棠に曉の露の滋きに似、腰つきはやなぎのはるかぜになびくが如く、まったく閨苑の瓊姫の如く、はるかにつきの宮の仙姉に勝る。その証拠には、次の詩、

はなのかんばせと麗しき質は更にあでやかなり
 秋の水のごときころ めでたき雪のごときおもむき
 鳳の眼は半ばまがりて琥珀をおさめ
 朱の唇は一つぶさくらんぼを点けたり
 あらわし来たれば玉の指はなよなよと軟らかく
 あるく処 金蓮はひとあしひとあしなまめかし
 白玉は香を生じ花は語を解し
 千金の良夜 実についやし難し

そのとき、李師師、軽やかに小さな足を運び、ゆるやかにもすそをさばいて、客間のうちへやってきました。……(岩波文庫巻8 P296)

と、1) やなぎのはるかぜになびくがごとき腰つき、2) 半ばまがりて琥珀をおさめたかのような鳳の眼、3) 一つぶさくらんぼを点けたりし朱の唇、4) なよなよと軟らかい玉の指、5) ひとあしひとあしなまめかしい金蓮、とつづく美の描写には、外見美に加え、遊郭にいなながら時の天子の気に入られるとともに、みずから燕青を天子に紹介することにより、招安の話がまとまるというストーリー内の役に関係するところがあっつか、「はなのかんばせと麗しき質は更にあでやかなり、秋の水のごときころ、めでたき雪のごときおもむき」と、「質や心やおもむき」など、内面的な美しさもともに備わっている形で描写がつづいている。

つぎに、白秀英。父白玉喬とともに舞台上で歌舞音曲をおこない、金を稼いでいる芸人。ふかいなじみが鄆城県の知県に就任したことで、鄆城県に出張興業にやってくるのだが、芝居小屋に、その芸を見にやってきた都頭雷横の目に映る彼女の舞台での様子。

鑼聲響處，那白秀英早上戲臺，參拜四方。捻起鑼棒，如撒豆般點動。拍下一聲界方，念了四句七言詩，便說道：「今日秀英招牌上明寫這，這場話本是一段風流蘊藉的格範。喚做〔豫章城雙漸趕蘇卿〕。」說了開話又唱，唱了又說，合棚價眾人喝采不絕。雷橫坐在上面看那婦人時，果然是色藝雙絕。但見：

羅衣疊雪，寶髻堆雲。櫻桃口杏臉桃腮，楊柳腰蘭心蕙性。歌喉宛轉，聲如枝上鶯啼；舞態蹁躚，影似花間鳳轉。腔依古調，音出天然。舞回明月墮秦樓，歌遏行雲遮楚館。高低緊慢，按宮商吐雪噴珠；輕重急徐，依格範鏗金戛玉。笛吹紫竹篇篇錦，板拍紅牙字字新。

那白秀英唱到務頭，這白玉喬按喝道：「雖無買馬博金藝，要動聰明鑑事人。……（第五十一回 插翅虎枷打白秀英 美髯公誤失小衙內 P756）」

どらのはやしに乗って、かの白秀英、早くも舞台上に登場、四方にあいさつすれば、ふりあげるどらのばち、まめをまくようにはやし立てます。柀きが一つはいつて、七言の詩四句を吟じますと、口上となり、

「本日は、秀英、かんばんに、はっきり書きつけました。このたびの講釈、いきですいなひとくんだり、双漸蘇卿予章城出あいの段、と申します。」

まくらを語れば、うたととなり、うたがおわれば、また語り、小屋じゅうがわきたちました。雷横、高みに腰かけて、かのおんなを見れば、なるほど、おんなっぷりも芸も、どちらもみごとです。げにげに、

うすぎぬの衣は雪を重ね、めでたきわけは雲をつむ。さくらんぼの口に杏のほおと桃のあぎと、やなぎなす腰に蘭のごとき心と蕙のごとき性。歌と喉はまるやかにして、声は枝の上の鶯が啼くが如く、舞いすがたはひらひらとして、影は花の間に鳳の舞うに似たり。ちょうしは古き調べにしたがい、音は天然より出づ。舞いは名月を回らして秦楼におとし、歌はながるる雲をとどめて楚館に遮る。高きと低きとはやきとゆるきと、しらべにしたがいて雪を吐き珠を噴く。軽きと重きとときとおもむろなるとは、きまりにしたがいて金をひびかせ玉をたたく。笛は紫の竹を吹きて篇篇錦にして、ひょうしぎは紅のぞうげをうちて字字に新たなり。

かくて白秀英、さわりのところへうたいすすめば、白玉喬、待ったをかけ、

「大して金になる芸ではなけれど、ものわりのいい方々におねがひいたす。……（岩波文庫巻6 P19）」

と、1) ゆたかなまげ、2) さくらんぼの口、3) 杏のほお、4) 桃のあぎと、5) やなぎなす腰、とつづく美の描写には、外見美に加え、6) 枝の上の鶯が啼くが如く歌声、7) 花の間に鳳の舞うに似た舞いすがた、と芸人職のベースなる歌舞音曲の歌声や舞姿が繊細に描かれ

る。そして、更にもう一つ、「蘭のごとき心と蕙のごとき性」と語られている内面的な美しさを記す描写。ストーリーの中における白秀英は、実際このような誉れを得るほどの内面的美をそなえているものか。それを考えると、自分の行った歌舞音曲に相応するお代を求めてひるまないほど、芸人として生きている自分を肯定しながら強く奔放に生きる姿は認められるにしても、「蘭のごとき心と蕙のごとき性」を持ち合わせている人物とは言い難いところであろう。それにもかかわらず、このように描写されるゆえんは、区々とつづく美しさ形容における講師の饒舌さがあってのこと、または色や芸を売って生業とする妓優の多くは外見的な美や芸をそなえ、それを生業に成り立たせていく笑みと忍耐そのものが内面美のイメージとしてむすびついているためのことと解いてみることができよう。

以上、“行院”籍の美人の代表格として東京きつての妓女李師師と女芸人の白秀英の登場場面を取りあげ、彼女らに適用されている美の描写を見てきた。ところで、『水滸伝』には、これら二人以外にも、“行院”籍の女性やそれに並べられる女性が大勢登場している。先祖伝来の医術をおさめ、遠方までその名が知られていた神医安道全が、妻の死後入れあげていたとする建康府煙花娼妓李巧奴、小さいころから槍棒などの武芸ばかりが好きでやっている史進がむかしからなじみにしていた東平府院子の行首娼妓李瑞蘭などは文字通りの“行院”籍の女性たちであり、宮中で音楽や舞踊を専門におこなう特定の身分のものを養成する役所であった教坊司や礼楽司に属し、皇室が挙行する各種の祝祭、式典、宴会などの儀式に出演したり、平生にあっては天子の耳目を楽しませたりするか、または軍士の娯楽に供されたりしていた女性たち、さらには町の酒場で歌を歌い、やっとの思いで日々の糧を得ながら生活をしていた女性の流しの歌手などがこれにあたるが、大方彼女らは美人で占められていることが確認できる。

4. 『水滸伝』中の美人描写

今までタイプ別に概略してきた『水滸伝』中の美人描写の内容を総合してみれば、以下のよにまとめられよう。

1) 『水滸伝』で描写される美人というのは第一容貌的な外見美をそなえた女性を指しており、これらの外見美がそなわった次に、資質、心性、おもむきなどの内面美やまたは置かれた立場による名分にふさわしい技芸のそなえや衣装のそなえが要求されるということがいえるとともに、容貌的な外見美のコンテンツは基本生まれるときに備わるものであるという認識でいたことが確かめられる。その内容を具体的にあげると票1のようにまとめられる。

2) 容貌的な外見美の中で、女性性を感じさせる最たる美のイメージは、細く、はるかぜになびくがごときしなやかで、「一えにあだめく」柳のような腰つきに求められていたことが確かめられる。これは、まず、どの女性の描写においても、腰つきに関する描写がぬかりなく埋められているところから確かめられるものであり、また魔女や夜叉に譬えられるほどのブザマな

『水滸伝』中の美人描写（曹述燮）

票1：『水滸伝』で描写される美人がそなえる容貌的な外見美

		扈三娘	潘金蓮	潘巧雲	李師師	白秀英
1	鬢/髪	霧鬢雲鬟 (ふさふさとした美しいびん髪やまげ)	雲鬟 (ゆたかなまげ)	黒鬢鬢兒 (黒くくろぐるしたる鬢)		寶髻堆雲 (ゆたかなまげ)
2	腰	柳腰 (ほっそりした腰つき)	纖腰 (細くてしなやかな腰)	一捻捻腰兒 (一えにあだめく腰)	腰肢如楊柳裊東風 (やなぎのはるかぜになびくがごとき腰つき)	楊柳腰 (やなぎなす腰)
3	手指	玉手 (玉のように白くて細い手)		玉纖纖手兒 (玉のごとしなやかなる手)	玉指纖纖軟 (なよなよと軟らかい玉の指)	
4	眉		眉似初春柳葉 (初春の柳の葉に似ている細い眉)	細彎彎眉兒 (細くまがりひかれたる眉)		
5	顔		臉如三月桃花 (三月の桃の花のようにあでやかな潤いを含んだ顔)	粉瑩瑩臉兒 (しろくつやつやしたる顔)		杏臉 (杏のほお)
6	口		檀口 (小さく赤い口)	香噴噴口兒(香りふんぷんたる口)	朱唇一夥點櫻桃 (一つぶさくらんぼを点けたりし朱の唇)	櫻桃口 (さくらんぼの口)
7	胸		酥胸 (やわらかな胸)	肉奶奶胸兒 (肉もりもりしたる胸)		
8	眼			光溜溜眼兒 (光りてきらきらしたる眼)	鳳眼半彎藏琥珀 (半ばまがりて琥珀をおさめたかのような鳳の眼)	
9	鼻			直隆隆鼻兒 (とおりにたかまりたる鼻)		
10	頰			紅乳乳腮兒 (紅くすべすべしたるおとがい)		桃腮 (桃のあざと)
11	体			輕孌孌身兒 (軽くたおやかなるからだ)		
12	腹			軟濃濃肚兒 (軟らかくふわふわしたるはら)		
13	足			躡尖尖脚兒 (せまく尖がりたる脚)	金蓮步步嬌 (ひとあしひとあしなまめかしい金蓮)	
14	脚			白生生腿兒 (白くういういしきあし)		

女性を描写するにも、凶悪な目つきと太くてごつごつとした手足のほか、「轆ろの軸のごとくにぶざまなる腰つき」という、まさに「柳のような腰つき」に相対するイメージ的描写でしめられているところからも容易に察せられるものである。

3) 『水滸伝』で描写される美人、つまり容貌的な外見美をそなえた女性は、持ち前のその美によって異性の耳目を引きつける存在となること、そしてまたこのような美をそなえた女性は主に男性を相手にして性の価値を有するものとして認識されていることが確かめられる。たとえば、潘巧雲の美に対する描写。彼女の容貌的な外見美が語られるところにおいて、潘巧雲と初対面する石秀の視覚では確かめられるはずのない、1 1) 軟らかくふわふわしたるはら、1 2) せまく尖がりたる脚にもようはなばなしきくつ、1 3) 肉もりもりしたる胸、1 4) 白くういういしきあしとつづき、常套句を用いているとはいえ、ありったけの心血を注いで描写しているところに加え、「一ところのせまくして湫湫、しまりて擲擲、紅くして鮮鮮、黒くして稠稠なる有り、はて是れなにもものなるか知らず。」と、これこそ視覚では絶対確認しえない隠密な部分に至るまで描写のサービスを惜しんでいないところ、そして『水滸伝』の美人描写の全体を通じて色や芸を売ることを生業とする社会層をなす“行院”籍の女性たちや社会における身分、地位、生活において“行院”籍の女性とほとんど似かよった存在の女性たちによって占められているというところなどから推し量られるものである。

おわりに

主に男性の好漢たちの生きざまを中心に据え、北宋社会を活写しているストーリー『水滸伝』。その中に、大小のキャラクターをそなえて登場する約70名の女性中、美人のイメージの実際は、第一容貌的な外見美をそなえた女性で、美のコンテンツは生まれるときに備わるものだという認識であったこと、容貌的な外見美の中でも、女性性を感じさせる最たる美は、細く、はるかぜになびくがごときしなやかで、「一えにあだめく」柳のような腰つきに求められていたこと、美人は、持ち前のその美によって異性の耳目を引きつける存在となるとともにこのような美をそなえた女性は主に男性を相手にする性的な価値を有するものとして認識されていたことを確認してきた。これは、

「法が文書化されて慣習にとつかわり、儀礼や作法の規則によって、社会が固定化され、男女のめいめいにそれぞれの役割や振る舞い方がさだめられていた。だか、こと男と女の間関係になると、両者をみちびく原則は、「女は絶対的かつ無条件に男より劣っている」という言葉に要約されうるようなものであった。」⁷⁾

とある如き伝統的な中国社会における男女関係において、女性の美というものはそれ自体価値あるものとしては存在しえず、あくまでも陽の男性の影として存在する陰の女性が陽にひきよせられるための、または陽にかかわるための一条件的性格を帯びるものであった。このことからすれば、本文で取り上げられている女性の美というものの性格は、女性自身が持ちあわせ

『水滸伝』中の美人描写（曹述燮）

た美しいものというよりは、むしろ男性が楽しみ、男性がもてあそぶ男性の付属品としての美という表現がより妥当なものであると定義づけることが可能であろう。

注

- 1) ブリタニカ国際大百科事典小項目電子辞書版 ブリタニカジャパン 2011
- 2) 中日辞典 小学館 2003 「美人」欄の参考：中国では以前、“柳叶眉（細長い眉）”、“杏核儿眼（アズメの種に似た大きくて丸い目）”、“鹅蛋脸（卵形の顔）”、“樱桃小口（唇が赤く小さい口）”が美人の条件とされていた。
- 3) 『水滸伝』。宋代の徽宗の時代、宋江ら 108 人の豪傑が梁山泊へ集結、その後の悲壮な運命を描くとされるもの。この作品は、中国本土は勿論のこと、韓国や日本など漢字文化圏内であまりにもよく知られているものなのでことさらに説明を待たないものであろう。以後、テキストは、一律、容余堂本『水滸伝』 施耐庵・羅貫中著 上海戸籍出版社 1988 を、日本語訳書は、完訳水滸伝 清水茂・吉川幸次郎訳 岩波文庫 1998 を用いる。
- 4) 水滸伝人物事典 高島俊男 講談社 1999 P192
- 5) 同上 P185
- 6) 大唐帝国の女性たち 高世瑜著 小林一美・任明訳 岩波書店 1999 P116
- 7) 中国女性の歴史 シャルレル・メイエール著 辻由美訳 白水社 1995 P23